

ここに
集う

東京・ライフエンディング研究会

「生と死」専門家が意見交換

東京の武蔵野・多摩地域の宗教者や葬儀社、石材店、保健師、医師、行政書士といった、人の死の前後に関わる専門家が集まり、緩やかなネットワークをつくっている。浄土宗蓮宝寺（東京都府中市）の小川有閑・副住職が、超高齢社会を迎える中、ライフエンディングの課題について切磋琢磨しようと地域の知人に提案し、2013年3月に発足。月に1度の定例会で情報や意見を交換し合っている。その後、紹介を通じて輪が広まり、参加者も増えてきた。時には雑談も交じえ、10人前後がそれぞれの専門の視点から議論を交わす。

先頃開かれた定例会では、東京大学病院精神科の岡村毅医師が認知症介護について発表。長年連れ添った伴侶との死別の悲しみからうつ病を発症し、その症状が「もの忘れ」として現れる「仮性認知症」の存在や、高齢のホームレス支援の現場で出会った、孤立無援で死んでしまえば永久に忘れられてしまうだろう老人を目の当たりにし、「認知症や終末期といった状況にある

人間には、宗教が与える安心感が必要なのではないか」と考えた経験などを語った。

行政書士から、相続案件で重要となる認知症患者の判断能力の医学的な診断基準の質問や、それぞれの現場で体験した事例の紹介などがあり、専門分野を越えた認識の共有が図られた。

小川副住職は「生と死では分野が別とされ、交流がなかなかなかったが、葬儀社が生前の相談に応じるなど、実際にはまたがって活動する人は多い。近接領域でもこれまで知らなかったことを学べ、檀家からの相談への受け答



定例会では様々な専門家の多彩な視点から「生と死」をめぐる議論を交わす

えにも役立つ。時には顧客に、信頼できる専門家としてメンバーを紹介することもあり、互いにとって良い関係を築けている」と研究会の意義を語る。今後は一般向けのセミナーや無料相談会など、いっそう地域に根差した活動もしたいと考えている。

（佐藤慎太郎）